幼児をもつ母親の「死」および「命の学び[i]」に対する意識

Attitudes toward death and death studies among mothers of young children

杉　山　幸　子

要約　本研究は、子どもにとって最も重要な環境である家庭に焦点をあて、保護者（母親）の死生観と「命の学び」に対する意識を探り、両者の関係とそれらの影響を及ぼす要因について検討したものである。因子分析の結果、「死後観」、「死の不安」、「死の教育の意識」、「臨終の立ち会いの意識」の４つの尺度を構成した。それぞれについて検討した結果、母親の年齢が低いほど死の不安が強いこと、信仰をもつ人は死後の世界を信じる意識が強いこと、身近な人を亡くした経験のある人は無い人よりも、死後の世界の存在や生まれ変わりを信じる傾向のあることが示された。また、ごく弱い傾向だが、死後の世界を信じる人は死の教育を必要であると考え、死の不安の強い人は子どもを臨終の場に立ち会わせたり葬儀で死者に対面させたりすることに消極的であることが示唆された。

Ⅰ．問　　題

近年、「いのち」や「死」の教育という問題が広く関心を集めている。これは、子どもや若者の間でいじめやそれを苦にした自殺、ホームレス襲撃、動物虐待、「子どもが子どもを殺す」事件など、悲惨とも陰惨ともつかない事件が後を絶たないためである。こうした出来事が報道されるたびに、今の子どもは命の尊さ、かけがえのなさを分かっていないのではないかという不安を多くの大人が感じているのではないだろうか。

さまざまな事件が起きる要因としては、子どもが育つ環境がここ数十年で大きく変化したことが指摘される。すなわち、少子化や早期からの受験教育の影響で、きょうだいや友だち同士で思い切り遊ぶ機会が減ったこと、祖父母と同居する家庭が著しく減少し、老いや死を目にしないままに成長する子どもが増えたこと、都会だけでなく田舎でも自然と触れ合う機会が少なくなり、一方でテレビやゲームなどのバーチャルな世界が子どもの心を大きく占めていること、携帯電話やインターネットの急速な普及により、子ども達のコミュニケーションの様子が大きく変化したことなど、現代社会のさまざまな側面に警鐘

が鳴らされ、また、戦後教育への反省も促されている（梶田，2006）。こうした現状を創りだしてしまったことについて、不安や恐れ、もしくは罪悪感をまったくもたない大人はおそらくいないだろう。

命について考えるには、死の問題を避けることはできない。しかし、日常生活から死が切り離されているのと同様、教育現場においても死の問題は長くタブー視されてきた。甲斐（2003）によると、「いのちについて考える授業」は2003年現在では年間100件以上の受講申し込みがあるが、開始当初の1997年にはわずか２校に過ぎず、呼びかけに対して拒否的な反応が少なくなかったという。そんななかで注目されるのは、1995年の阪神・淡路大震災と97年のＡ少年事件の衝撃を受けて、兵庫県で全国に先駆けて「生と死の教育」の試みが行われることになったことである。兵庫ではそれより以前の1988年に高木慶子らを中心に「兵庫・生と死を考える会」が設立されており、官民が手を携えて研究と実践を試みることとなった。その成果は『子どもたちに伝える命の学び』（兵庫・生と死を考える会，2007）という貴重な書物にまとめられている。この間、平成14年度施行の小学校学習指導要領で死の教育に言及されたことから、最近は全国的に「生と死の教育」「いのちの教育」への関心が高まっており、その傾向は幼児保育・教育においても認められる（高木，2003）。

保育や教育の場において命や死の問題を扱うには、子どもが死をどうとらえているのか、その認識はどのように発達していくのかを理解する必要がある。この点ではハンガリーのマリア・ナギーの研究を古典として、死の普遍性や不可逆性の認識がいつ頃確立するのかを検討した研究が多く（Speece & Brent，1984）、従来は９歳がその時期であると言われていたが、最近の我が国の研究では６～８歳（仲村，1994；杉本，2001）や７歳（高木，2004）という結果が得られている。また、多くはないが、子どもの「死」「いのち」のイメージや死後観について探った研究も見られ[ii]（例えば、仲村，1994；相良－ローゼマイヤー，2004，；杉本，1996；津野・石橋，2002）、日本の子どもたちの特徴としてアニミズムと「生まれ変わり思想」があることが指摘されている（相良－ローゼマイヤー，2005）。

これらの研究が幼児や児童を対象にした面接法で行われているのに対して、筆者は保育園、幼稚園の保護者を対象とした質問紙調査によって、子どもが「死」に言及したエピソードを収集し、死への気づきが生じる文脈を検討してきた（杉山，2006，2008）。これは、「命の学び」にとっては、知識として死を理解するだけでなく、死を「実感」することが大切であると考え、それが生じる自然な状況をとらえようとしたものである。その結果、予想された通り、少なからぬ子どもが親（特に母親）に対して死について尋ねたり恐れを訴えたりした経験をもっており、ごく大まかにいって、子どもは４歳頃に死への気づきを迎えること、それは時間（加齢）の認識と関連していること、身近な他者の死の経験がきっかけとなりやすいことなどが示唆された。

このように、死の理解は認知的な発達と関連しているのはもちろんだが、環境要因と切り離してとらえることができないのも明らかである。幼児を取り巻く環境としては、第一に家庭、そして保育園や幼稚園ということに

なろう。すなわち、子どもが死をどう理解するかは、家庭で死がどのように扱われているのか、親自身が死をどのように考えているのかと密接に関連していると思われる。また、幼稚園・保育園での「命の学び」を考えるにあたっても、それに対する保護者の意識を把握することは必要である。したがって、本論では幼児の保護者を対象として、彼らの死生観と「命の学び」に対する意識を探り、両者がどのような関係にあるのか、また、保護者自身の死の経験が死生観にどのような影響を及ぼしているかについて、検討を加えたい。

Ⅱ．方　　法

（1）質問紙の作成

青年や成人を対象として死生観尺度の構成を試みたものは数多く、最近では金児（1994）、河野（1998）、丹下（1999）、平井他（2000）、道廣他（2005）、岡本・石井（2005）などが挙げられる。このうち、岡本・石井（2005）の尺度は看護師の死生観を検討するために作成されており、下位尺度に「死の準備教育」への意識が含まれている[iii]ことや、項目が比較的平易である点で、本論の目的に適うものと思われた。ただし、幼稚園の保護者に回答を依頼することを考えて、それを参考にしながら、項目数はかなり少なく抑えることにし（ただし、命の学びについては質問を追加した）、計15項目の質問を作成した（表１参照）。さらに、死の経験として、身近な人を亡くした経験、臨終の立ち会いの経験、大病や大きな事故の経験、ペットロスの経験の有無を尋ね、信仰心の有無についても質問した。また、いのちや死について教えるために家庭で行っていること、幼稚園で行って欲しいことについて、自由記述で回答をお願いした。これ以外に前述の子どもの死のエピソードを尋ねているが、この部分は本論では扱わないため割愛する。

（2）手続き

2008年３月、八戸短期大学附属幼稚園の全保護者を対象として質問紙調査を行った。用紙を封筒に入れた状態で用意し、配布・回収の手続きは園に依頼した。回答者は109名であり、うち母親が101名、父親が８名であった。予想されたことだが、圧倒的に母親の回答が多く、母親と父親の比較を行うことは困難だったため、ここでは母親のデータのみを使用することとした。

(3) 本人及び家族の属性

母親の平均年齢は36.2歳（26歳から47歳まで。*SD* ＝4.5）、父親は37.7歳（25歳から50歳まで。*SD* ＝5.4）だった。子どもの数は平均2.0人（50％が２人）、長子の平均年齢は7.1歳である。７割以上が核家族であり、本人が何らかの信仰をもっている割合は16.8％だった。

Ⅲ．結　　果

(1) 尺度の構成

死生観と命の学びに関する15項目について因子分析（主成分分析、プロマックス回転）を実施し、固有値、寄与率と解釈可能性の観点から、4因子解を採用した（表1）。4因子による寄与率は61％だった。それぞれの因子に高い負荷を示す項目の内容から、因子名は第Ⅰ因子を「死後観」、第Ⅱ因子を「死の教育の意識」、第Ⅲ因子を「死の不安」、第Ⅳ因子を「臨終の立ち会いの意識」とした。

表1　死生観の因子分析結果（主成分法、プロマックス回転）

	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ
死後の世界がある。	.94	−.18	.16	.08
人は死んでもまた生まれ変わる。	.79	.08	−.11	.22
人が死んでも魂は残る。	.78	−.01	.08	−.11
亡くなった人の霊が生きている人に働きかけることがある。	.76	.09	.01	−.01
死はすべての終わりである。	−.54	.13	.39	.02
死についてあまり口にすべきではない。	−.40	−.24	.10	.27
死についての教育は必要である。	−.11	.89	.06	.15
子どもには特に死について教えようとする必要はない。	.03	−.80	.05	.08
死について考えることは大切である。	.24	.61	.21	−.14
死についてはなるべく考えたくない。	.00	−.55	.46	−.05
死は怖くない。	.10	−.09	−.79	−.00
自分が死ぬことを考えると不安でたまらない。	.16	.12	.77	.08
死とはこの世の苦しみから解放されることだ。	−.02	.15	−.46	.08
子どもが幼いうちは、葬儀に行っても死者に対面させるべきではない。	−.02	.07	.01	.90
たとえ子どもが幼くても、身近な人の死には立ち会わせた方がよい。	−.13	.03	.01	−.84

因子分析の結果をもとに4つの尺度を構成したが、「死についてあまり口にするべきではない」と「死についてはなるべく考えたくない」は因子への帰属が明確でなかったために削除した。尺度得点は因子得点ではなく、項目得点[iv]の平均値である。各尺度の項目数、信頼性および平均値は、「死後観」（5項目，α =.54，M =2.2）、「死の不安」（3項目，α =.47，M =1.9）、「死の教育の意識」（3項目，α =.72，M =1.7）、「臨終の立ち会いへの意識」（2項目，α =.72，M =3.1）であった。

(2) 母親の属性による影響

母親の年齢と各尺度得点の相関を検討したところ、年齢が低いほど「死の不安」が強い傾向が認められた（r =.29，p <.01）。また、信仰心があると答えた人は17人と少なかったため、信仰の対象は分けずに単に信仰の有無

による差の検定を行ったところ、信仰心のある人は無い人よりも、死後の世界を信じる意識が強いことが示された（$t(100) = -3.5$, $p < .01$）。

(3) 死生観と「命の学び」への意識の関係

死生観と「命の学び」への意識がどのような関係にあるかを調べるため、「死後観」「死の不安」と、「死の教育の意識」「臨終の立ち会いの意識」との間の相関を検討した。その結果、「死後観」と「死の教育の意識」との間に.32（$p < .01$）、「死の不安」と「臨終の立ち会いの意識」の間に.22（$p < .05$）の相関が見られた。すなわち、ごく弱い傾向だが、死後の世界を信じる人は死の教育を必要であると考え、死の不安の強い人は子どもを臨終の場に立ち会わせたり葬儀で死者に対面させたりすることに消極的であることが示された。

(4) 死の経験による影響

前述した４つのタイプの死の経験による影響が見られるかどうかを検討するため、各尺度について、それぞれの経験の有無による差の検定を行った。その結果、「死後観」において、「身近な人を亡くした経験」の有無による違いが認められた（$t(101) = -3.7$, $p < .01$）。すなわち、身近な人を亡くした経験のある人は無い人よりも、死後の世界の存在や生まれ変わりを信じる傾向のあることが示された。ただし、この経験は「ある」が95人、「ない」が８人と人数の偏りがひじょうに大きかった。その他の経験による違いはどの尺度においても認められなかった。

Ⅳ．考　　察

幼稚園の保護者（母親）を対象に、死生観と命の学びに関する意識の構造を検討したところ、「死後観」、「死の不安」、「死の教育の意識」「臨終の立ち会いの意識」の４つの因子が見出された。質問項目を減らしたせいか、参考にした岡本・石井（2005）では「人生の終焉」という独立した因子を構成していた２項目（「死はすべての終わりである」「死とはこの世の苦しみから解放されることだ」）がそれぞれ「死後観」と「死の不安」に含まれ、死生観への反応は２つの因子に分かれた。一方で、独自に加えた「子どもが幼いうちは、葬儀に行っても死者に対面させるべきではない」「たとえ子どもが幼くても、身近な人の死には立ち会わせた方がよい」という項目は、それ以外の死の教育に関する意識とは別個の因子を構成した。この２つの項目は状況を限定した具体的な問いかけであるため、それ以外の一般論的な質問とは反応が異なったものと思われる。

因子分析の結果をもとに４つの尺度を構成したが、それぞれの平均値を見ると、「死後観」については、死後の世界の存在や霊の働き、生まれ変わりがあるとは「あまり思わない」という結果だった。また、「死の不安」については、不安が「ややある」レベルであった。注目されるのは、一般論的な「死の教育」については必要だと「あまり思わない」のに対して、葬儀で死者と対面させたり身近な人の死に立ち会わせたりすることについては、そ

うすべきだと「やや思う」というように、反応に開きがあったことである。おそらく、「死についての教育」というような言い方では、それが意味する内容がイメージしにくいため、結果的に「あまり必要ではない」というレベルに留まったのではないだろうか。それに対して、「臨終の立ち会い」のように具体的に内容を示した場合は必要性の認識が高かったということは、こうした調査を行う場合に、具体的に内容を示して問う必要があることを示唆しているといえよう。

回答者の属性による検討では、年齢が低いほど死の不安が強いことが示された。死の不安（death anxiety）や死の恐れ（fear of death）について、欧米ではDAS（Death Anxiety Scale）と呼ばれる尺度を用いた研究が膨大に蓄積されている（河野　印刷中）。カステンバウム（Kastenbaum, 1992）はDASを批判しつつ、それらの研究を概観しているが、それによると、年齢による違いは認められないか、あるいは高齢者の不安が他の年齢に比べて小さいことを示す研究が多いという。また、松田（2008）のレビューによると、青年期と中年期・老年期の間で、前者において死の不安が強いことが示唆されている。しかし、本研究では対象者の年齢層が成人前・中期であり、どちらの知見も適用することができないため、この点については今後の検討が必要となる。

宗教と死生観の関係については、信仰をもつ人は死後観を有する（死後の世界の存在や霊の働き、生まれ変わりを信じる）ことが示唆されたが、死後のことを説かない宗教がないだろうことを考えれば、これは当然の結果といえよう。

さらに、回答者の死の経験による影響について検討したところ、身近な人を亡くした経験のある人は無い人よりも、死後の世界の存在や生まれ変わりを信じる傾向のあることが示された。これは、「そう信じたい」という想いの表れだと考えられる。死の経験による影響については、林（2005）が死別経験のない者はある者に比べていのちの教育に消極的であるという結果を示しているが、本研究ではそうした結果は見られなかった。

死生観と「命の学び」への意識との関係については、死後の世界を信じる人は死の教育を必要であると考え、死の不安の強い人は子どもを臨終の場に立ち会わせたり葬儀で死者に対面させたりすることに消極的であることが示唆された。これは、子どもの「命の学び」の環境が親の死生観によって左右されることを改めて裏付けているといえる。

では、家庭では実際にどのような「命の学び」が実践されているのだろうか。「いのちや死について子どもに教えるために家庭でしていること」を自由記述で尋ねたので、その代表的な回答を挙げてみると、

- 死やいのちについて話をする。（13件、うちキリスト教の教えが１件、浄土宗の教えが１件）
- 生き物が死んだときにいのちについて話をした。（８件）
- 身近な人が亡くなった機会に子どもにいのちや死について話をした。（７件）
- 命に関するテレビ番組（ドキュメンタリーやドラマ）を一緒に見て話しをする。（６件）
- 生き物を飼う。（５件）
- 葬儀や法事に連れて行った。お骨を拾わせた。（４件）

・墓参りの時に話をした。（２件）
・位牌に手を合わせる。（１件）
などであった。折々に子どもにいのちについて話をしている家庭が多く、命の学びについて関心が高いことが窺われる。

一方、幼稚園に対する期待としては、「生きていくうえで自然に身につけていくものだと思う」「親がしなければならない事かなと思う」などの理由で、幼稚園では必要ないという意見も見られた。しかし、「生命の成り立ち、どのようにして自分が存在しているのかをこどもに分かるように教えてほしい」というように、何らかの形でいのちの大切さを子どもに教えて欲しいという意見が圧倒的に多く、なかには「どの様に教えたら良いか、教えて頂きたいです」「親として子どもへの『死』の話し方など、親自体が分からず、どう話したら…というところもありますので、親が勉強できる機会もあったらと思います」というように、母親自身が教えることに困難を抱えており、勉強する機会を幼稚園に求めているというコメントも認められた。

このように、「命の学び」の必要性を感じている母親は多いが、一方で「『死』についてより、いのちの大切さを教えてはどうか？」というように、「死」そのものを扱うことに対しては抵抗を示す意見も少なくなかった。また、教える方法としては、家庭での実践と同様に、絵本や紙芝居を使ったり、動植物を育てたりすることを求める意見が多かった。

前述のように、現在教育現場において命の学びへの関心が高まっているが、実践報告のほとんどは小学校以上におけるものであり（例えば、近藤（2007））、幼児期の学びについては、理論的な関心は高くても、まだ成果は乏しい状況である[v]。これは、幼児保育・教育の場で行われていることはある意味ですべて命の学びに通じるため、あえてプログラム化して客観的にとらえることが困難だからかもしれない。しかし、保護者のコメントからも伺われるように、おそらく、これからは問題意識を保護者と共有し、意識的にそうした試みを行っていく必要があるのではないだろうか。

謝　辞

本研究にご協力くださった八戸短期大学附属幼稚園の職員と保護者の方々に深く感謝申し上げます。

引　用　文　献

林和枝　2005　母親の死生観および死別体験が子どもへのいのちの教育に及ぼす影響について　愛知学院大学文学部紀要，34，208.

平井啓他　2000　死生観に関する研究—死生観尺度の構成と信頼性・妥当性の検証—　死の臨床，23（1），71－76.

兵庫・生と死を考える会（編）　2007　子どもたちに伝える命の学び　東京書籍.

甲斐裕美　2003　子どもへのDeath Education　小児看護，26（13），1741－1744.

梶田叡一　2006　「いのち」を大切にする心－実感的理解を深める　児童心理，60（10），866－874.

金児曉嗣　1994　大学生とその両親の死の不安と死観　人文研究／大阪市立大学文学部紀要，46，1－28.

Kastenbaum, R. 1992　The Psychology of Death.　Springer Publishing Company, Inc.（カステンバウム著　井上勝也監訳　2002『死ぬ瞬間の心理』西村書店）

河野由美　1998　看護師の死生観、宗教観と死の不安の計量的研究　看護総合，29，88－90.

河野由美　印刷中　死と宗教　金児曉嗣（監修）　宗教心理学概論　ナカニシヤ出版

近藤卓　2007　いのちの教育の理論と実践　金子書房.

松田茶茶　2008　若者にとっての死—“死”という脅威は若者に何をもたらすか—　日本心理学会第72回大会ワークショップ「宗教心理学的研究の展開（6）—死生学と宗教心理学の相互互換性を探る—」資料（未公刊）.

道廣睦子・土井さや子・中桐佐智子　2005　死生観尺度の信頼性・妥当性の検討　吉備国際大学保健科学部紀要，10，11－17.

中村照子　1994　子どもの死の概念　発達心理学研究，5，61－71.

岡本双美子・石井京子　2005　看護師の死生観尺度作成と尺度に影響を及ぼす要因分析　日本看護研究学会雑誌，28（4），53－60.

相良－ローゼマイヤー－みはる　2004　子どもの死と死後の世界観　日本看護科学会誌，24（4），13－21.

相良－ローゼマイヤー－みはる　2005　日本の子どもたちの生と死の概念研究レビュー　小児看護，28（6），782－787.

Speece, M. W. & Brent, S. B.，1984，Children's understanding of death：A review of three components of a death concept.　Child Development, 55, 1671－1686.

杉本玲子　1996　子どもの死生観と宗教心　青山学院女子短期大学総合文化研究所年報，4，23－39.

杉本陽子　2001　子どもの「生と死」に対する認識　日本健康医学学会誌，10（1），2－11.

杉山幸子　2006　幼児の死の概念に関する探索的研究—「死」への気づきの体験について—

日本心理学会第70回大会発表論文集，1104.
杉山幸子　2008　子どもが「死」を意識するとき　日本心理学会第72回大会発表論文集，1169.
高木慶子　2004　子どもの「死の認識」の確立時期　21世紀ヒューマンケア研究機構研究報告，10，21－30.
高木友子　2003　幼稚園におけるデス・エデュケーション（死の教育）についての予備的研究　湘北紀要，24，63－71.
丹下智香子　1999　青年期における死に対する態度尺度の構成および妥当性・信頼性の検討　心理学研究，70，327－332.
津野博美・石橋尚子　2002　子どもの生と死の認識といのちの教育　子ども社会研究，8，23－39.
内田伸子　2007　命のかけがえのなさが理解できるか－子どもたちの「死」の概念　袖井孝子（編著）死の人間学　金子書房，43－70.

---

i いのちの教育、死の教育、生と死の教育など、この問題の表現の仕方はさまざまである。英語では以前はDeath Educationが一般的だったが、死は教えることはできず、ともに学ぶものであるという認識から、最近ではDeath Studyと表現するようになった。本論ではこの認識を踏まえ、また、幼児にとっては死よりも命の大切さを知ることが第一であると思われることから、兵庫･生と死を考える会（2007）を参考に、「命の学び」とした。ただし、調査項目には「教育」という言葉を使用している。

ii こうした研究には小児看護の領域から発信されたものが多い。

iii 岡本・石井（2005）では、死の準備教育への意識も死生観の一部とされているが、本論ではそれは死生観とは別に「命の学び」への意識としてとらえている。

iv 各因子において因子負荷量が正と負の項目は意味的に逆であるので、項目得点（そう思う・ややそう思う・あまりそう思わない・そう思わないの４段階）は意味が同じ方向になるように付与した。

v 兵庫・生と死を考える会（2007）には幼稚園における実践例が紹介されている。また、内田（2007）は幼稚園で金魚が死んだときの教師と子どもの会話を通じて、子どもが死の概念を獲得していく過程を考察しているが、これは命の学びの一例といえよう。